

関西大学FDフォーラム

Vol.4



特 集 ビデオ「材料工学実験」の制作にあたって·····2

2002年度 春学期・前期「学生による授業評価」アンケート報告·····4

- アンケート結果
- 2002年度 春学期・前期「学生による授業評価」アンケート結果について
- 教員の意見にみる授業評価アンケート・FD活動の論点について
- 外国語の学習と評価
- 今後の授業評価について

編集・発行

関西大学 全学共通教育推進機構
FD部門委員会・授業評価部門委員会

発行日

2002年11月20日

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35
Tel 06-6368-1121 Fax 06-6368-0083
URL <http://www.kansai-u.ac.jp/>

魅力ある授業をもとめて

全学共通教育推進機構長〔副学長〔共通教育担当〕〕 河田 悅一

先日、新聞を読んでいて、おどろいたことがある。

昨(2001)年に外国人女性と国際結婚した日本人男性は、3万1972人。そのうち、中国人女性と結婚したものが1万3936人で約43.6%を占める、というのである(『毎日新聞』9月29日)。

そういうえば、日本ユニセフ協会大使として社会活動に貢献しているアグネス・チャンさんも、日本人男性と結婚して幸せな家庭を築いている。

昨年11月、「2001年度秋季人権啓発行事」の講演のために関西大学を訪れたアグネスさんと、話をする機会があった。12歳のとき、香港のミッション・スクールでボランティア活動の大切さを学んだ彼女は、カナダのトロント大学で「社会児童心理学」を修め、子連れ留学したスタンフォード大学では36歳のとき博士号を取得。そのテーマは、なんと「日米高等教育の比較研究」であった、という。

ビデオ「材料工学実験」の制作にあたって

工学部材料工学科教授 小林 武

一、はじめに

昨今、社会の変動が著しく、変革の時代と言われているなかで、産業界においてはその構造の変革が問われ、その波及を受けて工業用材料の分野においても高度な機能性が追求されていると同時にニーズの多様化への要求が高まっている。加えて高度情報化社会の発展や、ISO 14000系で提唱されている「地球環境に配慮した物作り」の標準化など、材料開発に対する柔軟性と迅速性が求められている。一方、大学においても例外ではなく、教育・研究の在り方が問われ、厳しい変革が求められている。その一例として国立大学の再編・統合に向けての改革、あるいは大学生の学力不足の解消に対する模索などが挙げられよう。なかでも、技術系学部に所属する当学科では後者は切実な問題であり、科学技術立国であるわが国の大学教育レベルを上げ、優秀な技術者を育てることが必要であるとした観点から、関連学会が中心になって1999年に「日本技術者教育認定機構」(JABEE)を設立した。このような背景のなかで当学科では2002年度にJABEEの認定を受けるべく努力を続けてきている。したがって、ここで紹介させて戴く「材料工学実験」に関するビデオは一貫した材料技術者教育の一環として捉えて戴ければ幸甚である。

二、学科の教育理念

1 教育の位置付け

当学科においては、材料工学を工業のあらゆる分野で要求されている材料を供給するための学問と位置付けている。すなわち、教育対象を金属、セラミックス、半導体等の無機材料に展開し、高分子材料を含む素材分野を視野に入れて、図1に示すような「材料反応プロセス」「材料加工プロセス」「材料物性」の三つを柱とした。一方、豊かな創造力と表現力を持って材料分野の諸問

あちらの大学はどうでしたか、と訊ねると、欧米の学生はよく勉強しますし、教授は教え方が上手でした、という言葉がかえってきた。

その言葉を聞いて、三十年前、地方の国立大学に職をえて赴任する私に、恩師がのべた言葉を想い起こした。

それは、「学生の前では同僚の先生の悪口を決して言わぬこと、授業は念入りに準備し教える工夫をすること」の二カ条であった。

どちらも、言うは易く行なうは難し、である。

授業をいかに上手に行なうか、どのように説得的でわかりやすく、学生諸君の知的好奇心を駆り立て、啓発していけばよいのか。昨年来、関西大学で撮影された三人の先生方の授業のビデオ——大教室を舞台に巧み且つさわやかな弁舌でなされる小田原敏(総合情報学部)助教授の講義、学生の勉強成果が見事にわかる興味深い森井暉(法学部)名誉教授の模擬法廷の授業、実験を積み重ねながら学生にうまく意見を発表させる関口理久子(社会学部)助教授の心理学実験授業——を見つめながら、いま私は恩師の言葉を改めてかみしめている。

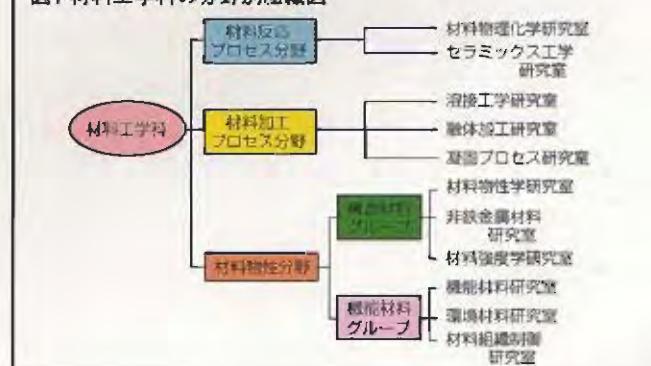
題に対処しうる研究・技術者の育成を目指している。

また材料の供給が自然・人類・社会に及ぼす影響について強い責任感を持ち、自律した研究・技術者の育成を行っている。さらに、多面性を持った思考力・技術者倫理・自立性・コミュニケーション能力を修得するための教育に関するカリキュラムを設定している。

2 教育の特色

当学科においては、講義・実験・実習・特別研究・インターンシップ・研究室合宿・研究会・工場見学などを通じて、卒業後の活躍分野を意識して地域社会、なかんずく関西地域における循環型・環境適応型社会の構築に貢献できる材料技術者の備えるべき能力を養うための教育を行っている。

図1 材料工学科の分野別組織図

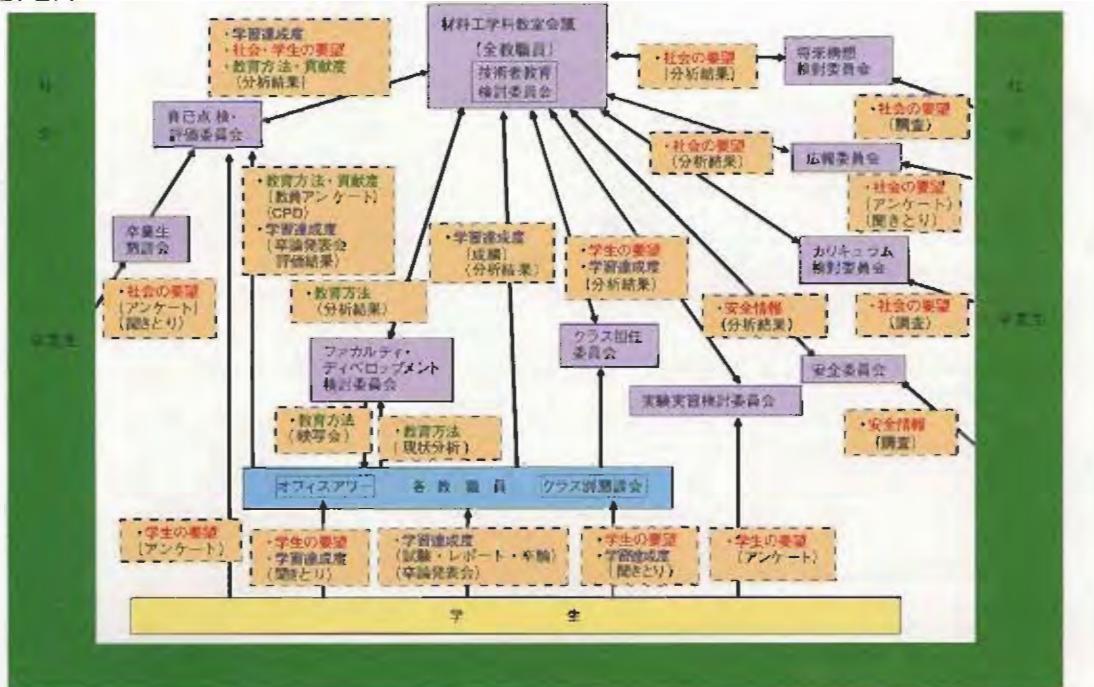


三、材料技術者教育プログラムにおける学習・教育目標

当学科の「材料技術者教育プログラム」における学習・教育目標を下記に示す。

- (A) 人類の幸福・福祉と技術者倫理について考える能力の修得
- (1) 地球的視点から多面的に物事を考える能力とその素養
- (2) 材料工学と技術者倫理

図2 情報収集とチェック



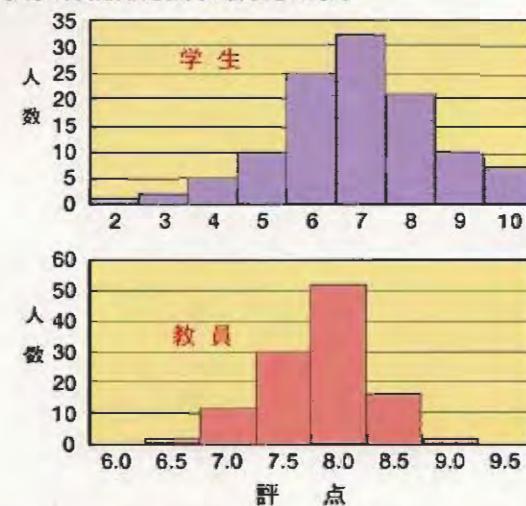
- (B) 数学、自然科学、情報技術の基本知識とそれらを応用できる能力の修得
 (C) 材料工学の基本知識の修得
 (D) 材料工学の基本技術とまとめる能力の修得
 (E) 材料工学の専門知識の修得
 (F) 専門技術の展開能力ならびに問題提起・解決能力の修得
 (G) 情報収集と発信を行う能力の修得
 (H) 循環型社会に適応した材料技術者の備えるべき能力の修得

四、材料工学実験

当学科の材料工学実験は、2年次(前、後期)の「材料工学実験ⅠおよびⅡ」、3年次(前、後期)の「材料工学実験ⅢおよびⅣ」である。これらの実験で共通している点は実験項目が8テーマで、学生はローテーションで8週間かけてすべての実験を行うようになっている。実験の学習・教育目標は上述の(B)、(D)、(F)、(G)に該当する。今回ビデオで紹介する内容は「材料工学実験Ⅲ」の学習・教育目標(G)に含まれるプレゼンテーション能力およびコミュニケーション能力の修得に相当する発表会を中心として制作されたものである。ビデオでその雰囲気を感じてもらいたい。学習・教育目標は社会の要求や学生の要望を考慮して設定されなければならない。当学科では図2に示すようにアンケート・聞き取り調査・卒業生懇談会・学生へのアンケートなどで収集した情報を諸種の委員会で検討し、学習・教育目標が設定されている。

- 発表会後に次の項目について、学生に自己評価(各項目10点満点)のアンケート調査を行った。
- 発表内容を充分に理解していたか。
 - 相手に理解させようとする努力が見られたか。
 - OHPシートの図や表の大きさ、文字の大きさなどが適切であったか。
 - 発表態度(声の大きさ、言葉尻り、姿勢等)が適切であったか。

図3 学生の自己評価と教員の評価との対比



Cの項目について学生の自己評価の集計結果と教員の評価結果を併せて図3に示す。発表用のOHPシートの出来具合に学生と教員の間に差が見られる。学生のなかにはOHPシートの出来具合が極端に悪いと思い込んでいる人と、完全な出来栄えであると思っている人がいる。教員の指導を重く受け止めた人と、楽観的に考えている人がいるようである。このように集計の分析・検討結果を基に、今後の指導方針に役立て、常に教育の継続的改善に努力している。

五、おわりに

当学科では図2で示した継続的に教育プログラムを改善するためのシステムを使用し、実験を始めとして演習、講義などの点検評価を行ない、常により良い教育プログラムが改善・構築できるように努めている。

最後に、ビデオ制作にあたり、種々ご配慮を下さった関西大学全学共通教育推進機構の関係者の方々ならびにビデオ撮影に際し、種々尽力下さった(株)オレンジバオの方々に心よりお礼を申し上げます。

2002年度 春学期・前期「学生による授業評価」アンケート報告

趣旨及び目的

より質の高い教育を行うためには、直接学生の声を聞き、授業に反映させることが必要であるとの認識に立って、その有効な手段である「学生による授業評価」を全学的に実施する。

実施方法

- (1) 無記名のアンケート用紙及び自由記述用紙による(工学部の自由記述用紙は、担任者の意向により記名式にすることができる)。
- (2) 学部・機構事務室又は講師(教員)控室で、授業担任者がアンケート用紙及び自由記述用紙を受けとる。
- (3) 授業担任者が、アンケート用紙及び自由記述用紙を当日の全出席学生に配布し、回収する。
- (4) 回収したアンケート用紙は、授業担任者が学部・機構事務室又は講師(教員)控室に提出する。自由記述用紙は回収後、担任者が保管する。
- (5) 各学部・外国語教育研究機構に提出されたアンケート用紙を回収し、データを入力する。
- (6) 集計結果は、科目毎に一覧表にまとめ、各授業担任者へフィードバックする。

実施期間

2002年6月17日(月)～6月29日(土)

対象

- (1) 第1部・第2部の2002年度開講(秋学期・後期開講科目を除く)の科目的講義科目(教養科目・保健体育科目・専門教育科目)及び外国语科目(日本語を含む)を対象とする。複数担任科目(リレー講義等)は除く。
ただし、通年科目については、担任者の申し出により、実施することができる。各学部・外国语教育研究機構の意向により、講義科目及び外国语科目以外の科目も対象とすることができる。合併科目は担当学部でとりまとめて行う。
- (2) 各学部及び外国语教育研究機構の専任教員を対象とする。
- (3) 非常勤講師は、各学部・外国语教育研究機構の意向により実施することができる。
- (4) 学部に関する個別の質問は、別途各学部が質問項目を作成することができる。

集計方法

科目毎の単純集計及びクロス集計を行う。

質問項目

次ページを参照のこと。

回答方法

各質問項目に関して、次の5段階で評価し、該当する番号を<回答欄>に記入。

- 【⑤ 強くそう思う ④ そう思う ③ どちらとも言えない
 ② そう思わない ① 全くそう思わない】

アンケート結果

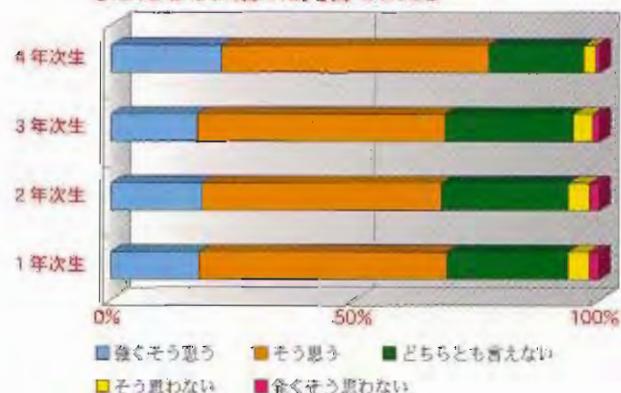
実施状況

	対象	講義		外 国 語	全 体
		科 目(ク ラ ス) 数	学 生 数		
春 学 期 ・前 期 終 講 科 目	実 施	科 目(ク ラ ス) 数	871	156	1,027
	回 答 者 数	59,989		4,170	64,159
	実 施 率	84.89%		97.50%	86.59%
	回 答 率	38.41%		79.92%	39.75%
	通 年 科 目	科 目(ク ラ ス) 数	24	40	64
実 施 合 計	回 答 者 数	878		1,219	2,097
	科 目(ク ラ ス) 数	895		196	1,091
	回 答 者 数	60,867		5,389	66,256

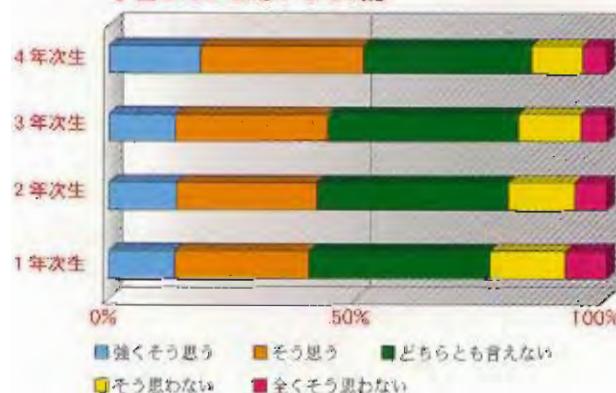
注1)「学生数」「回答者数」については延べ人数 注2)「実施率」「回答率」については小数点第3位を四捨五入

学年別単純集計(全学部・講義科目)

<問1>授業内容は、講義要項、授業計画等で示したものに沿った内容でしたか

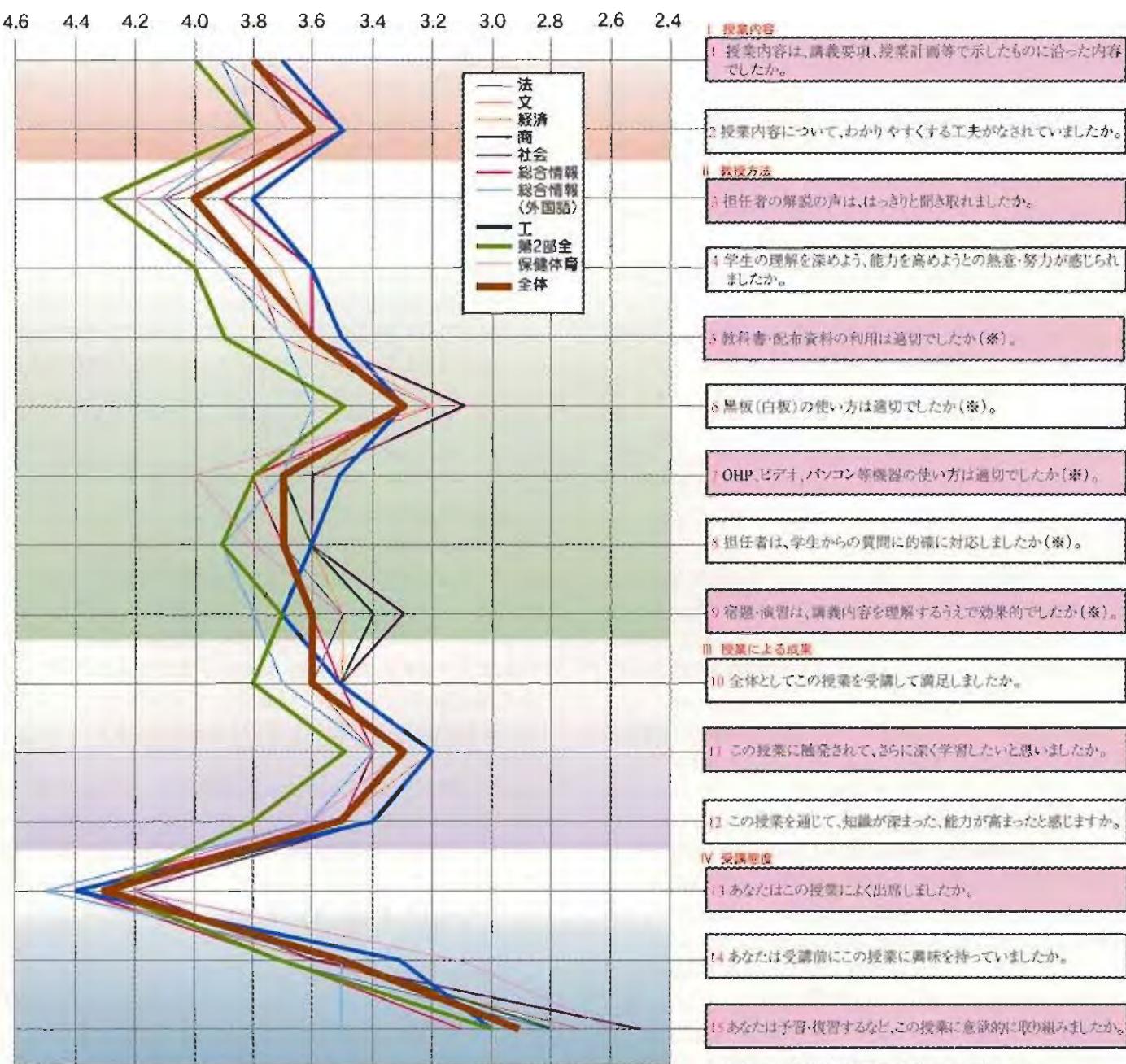


<問11>この授業に触発されて、さらに深く学習したいと思いましたか



質問項目の単純集計(講義科目)

(5段階評価の平均値)



※該当しない場合は回答欄に⑥を記入してください。

2002年度 春学期・前期「学生による授業評価」アンケート結果について

FD部門・授業評価部門委員会委員 長谷川 伸

「学生による授業評価」アンケートは、より質の高い教育を行うためには、直接学生の声を聞き授業に反映させることが必要であるとの認識に基づき、2000年度から全学で実施してきた。このアンケートは今回(2002年度春学期・前期)で4回目となる。今回の実施率は、科目数で見ると86.59%(1,186科目のうち1,027科目)、回答数で見ると39.75%(のべ161,405名中64,159名)となり、いずれも前年同期(第2回目)と比べてわずかながら低下している。実施時点の出席率に強く影響される回答者実施率の変動はとりあえずおくとしても、試行期間を通じて趣旨が徹底されるに連れて上昇してしかるべき科目実施率が逆に低下したことには注意しなければならない。また依然として科目実施率が95.92%から80.00%までと学部間にかなりのバラツキが見られることも注意を要する。

質問項目のクロス集計(学部別・講義科目)

「問14(あなたは受講前にこの授業に興味を持っていましたか)」で④・⑤の評価をした学生の「問10(全体としてこの授業を受講して満足しましたか)」の結果

全体としてこの授業を受講して満足しましたか



教員の意見にみる授業評価アンケート・FD活動の論点について

FD部門・授業評価部門委員会委員 雨宮 俊彦

学生への授業評価アンケートの主要な目的は、教員にたいする、学生からの評価情報のフィードバックである。授業評価をうける教員は、学生による授業評価アンケートを、どう考えているのだろうか。授業評価部門の委員数人が、それぞれ知り合いの教員に、意見をうかがった。27名から意見が寄せられた。サンプルが少なく偏りもあるだろうから、これを教員の平均的・代表的な意見とはできないだろう。しかし、意見には、多種多様で興味深い論点が示されている。今後の議論と検討の出発点として貴重な資料である。

以下、1.アンケート項目、2.自由記述、3.学生評価とFD活動について、論点ごとに整理して主要な意見をしめす。

一、アンケート項目の評価の印象と利用

1.アンケートについては問題点の指摘が多かった

とくに注目すべき情報がつたわらないので、あまり参考にならないという意見が多かった。具体的な問題点の指摘としては、以下のようなものがあった。

A.項目の問題点:項目が一般的すぎるという意見が多かった。一般的で項目が多すぎるので、科目にあわせてカスタマイズできるようにしたらなどの提案もあった。また、さらに勉強する意欲がわきましたかなどの主観的項目は結果の解釈にこまるとの指摘もあった。

B.結果の提供のしかた:結果がもどってくるのが遅すぎる、平均値のみでは情報不足、授業改善へつなげる支援がない、教室や設備についての評価を個々の教員にしめされても対応できない、などの意見があった。

2.アンケートから的確に情報を読みとっている教員もいる

肯定的な意見は、黒板の利用など、自分で気づかなかつた点のチェックとして有用、おおよその傾向はわかるなどである。出席の良い学生の評価を参考にしている、昨年度の結果と比較している、おなじ科目的別クラスの結果と比較しているなど、結果の利用に工夫をしている教員もいた。

3.今後の課題は多い

FDフォーラムVol.3のアンケート結果の分析で、高出席率者は全体とアンケート結果があまり変わらないことが示された。しかし、個々の授業では、出席率の情報を有効につかっている教員もいる。出席率は、現在は、主観的な5段階評定だが、より具体的な回数にすれば、より客観的で有効な指標となるかもしれない。同様に、アンケート時の教室の着席位置(前列・中列・後列)も、施設に関する設問などの解釈に有効かもしれない。アンケート結果の提供は、昨年度との比較をしめしたり、評価のばらつきもふくめてグラフ化するなど、情報を有効に利用しやすくするような工夫が必要だろう。

二、自由記述の印象と利用

1.ほとんどの教員が自由記述には注目している

自由記述については、「学生の率直な思いが反映されるので、ハッと思わせられることもあり」など、評価情報として有益だという意見が多かった。とくにアンケート項目にない具体的な問題点の指摘は直接の参考になっている。

一方、より具体的でないほめ言葉や不満などについては、

評価をどう評価すべきかの意見が示されている。以下に、例を引用する。

「モニターが見えにくいなどアンケートの点数には表れない不満が書いてあったように思います。また、全体的な印象では、授業について、機器等への強い不満を持っている学生か、積極的に評価してくれている学生が自由記述をしてくれたように思いました。その点、自由記述が学生全体の最頻値あるいは平均とは異なる意見であるように思いますので、強い改善の要望についてはよく考慮する必要がもちろんありますか、良い評価については、平均スコアと対比しながら慎重に受け止めるようになっています。」「講師の「人格非難」に終始する記述もあって、不愉快な思いをすることもあった。」「ほめ言葉か不満しか書いてないのであまり意味がない。具体的に書くよう指示する必要がある。」など。

2.講義レベルについての学生の意見には対応に苦慮している

講義内容が難しすぎるという意見とともに進んだ内容をとる矛盾する意見がよせられるので対応に苦慮しているという回答が数件あった。ある教員は、基本的には講義内容は学生アンケートによるべきではないとして、つぎのような見解をしめしている。「学生によるアンケートはあまり参考にならないと思っています。たとえば、ただビデオを見せるような(手抜きの)授業の方が「わかりやすかった」と評価されたり、「資料が多すぎる」という理由で評価が下がったりします。また、「教えるべきことを教えているか」ということが評価基準とはなりえないこともあります。」基礎科目なので高度な内容はExtraとしてあつかう、授業で自由記述の両方の意見をしめし講義の方針を説明するなどの対応の工夫を紹介している教員もいた。

三、授業評価アンケートとFD活動についての意見

1.具体的な施策の提案もいくつかあった

授業評価アンケートの時期をもうすこし早めて、中間評価として授業の後半で参考にできるようにしたらよいとの意見が数名の教員からあった。また、現在一部の科目でおこなわれている、受講姿勢・受講態度などを問う「受講者自己評価」アンケートを他の少人数クラスでもおこなったらという提案もあった。全学一律に実施するアンケートではなく、各教員により適したアンケートの開発を支援するほうがよいとの意見もあった。

2.授業評価には学生評価に加えpeer-reviewと第三者評価も導入すべきである

授業評価アンケートがマンネリ化しつつあるという危惧が何人かの方から示された。マンネリ化をさけるには、何のための授業評価アンケートかを明確化し情報フィードバックをふくめてその意義を学生、教員につたえる、授業はどうあるべきなのかの議論をふまえた授業評価アンケートをおこなう必要があるなどの指摘がなされた。また、授業評価は学生の評価だけでなく、peer-review、第三者評価もおこなうべきとの指摘もあった。つぎは、peer-reviewについての意見である。「個人的には行って欲しくないのであるが、学生の評価と共に、peer-reviewを行うべきであると考える。誰かを攻撃するために使

うのではなく、授業の改善のためには、欠かせないことである(繰り返しになるが、私個人としては、他の教員に見られたくないが、peer-reviewの効果は疑いないと信じている)。」peer-review、第三者評価は、二の2で指摘された「教えるべきことを教えているか」の評価には有効だろう。

3.大学全体としての教育の質を高めるための支援と評価のシステムが必要である

FD活動については、様々な意見が示された。モデル授業のビデオが役立っている。講義のTipsについての情報がほしいなど。次は、インセンティブもふくめた教育支援システム

の必要性を訴える意見である。「FDは単に教員の教え方の改善をすること目的ではなく、大学全体としての教育の質を高めることを目指さなければいけないと思う。たとえば、現状の評価システムでは教育に力を入れてもあまり評価されない。教育の質を向上させるには、そのためのインセンティブを教員に与えなければだめだ。支援システム(たとえばコンピュータの支援ディスク、教材開発支援など)が整っていないと、単なる教授法を改善しても限界を感じる。評価アンケートもしだいにマンネリ化してくるだろう。学生と教員へのフィードバックとインセンティブを明確にする必要がある。」

外国語の学習と評価

FD部門・授業評価部門委員会委員 斎藤 栄二

「外国語の学習と評価」というタイトルで書き出しましたが、私の経験はほぼ英語の世界ですので、英語を通して考えてきたことを述べさせていただきます。

評価には、当然のことながら学習者である学生への評価と授業者である教師への評価があります。学習者の評価については、今はたいへんなことが起こっています。絶対評価の導入です。「絶対評価元年」の名のもとに、小学校や中学校の先生方はこの4月以降悪戦苦闘中です。高校は来年度の4月から絶対評価に入ります。私自身も4月以降中学校の研究会に呼んでいただいたうちの8割以上が、「絶対評価について話してほしい」ということでした。

一方、教授者に対する評価です。FD部門、授業評価部門としてはこちらの方がメインの仕事となります。今は評価項目についても、先生方の意見をいただきながら毎年改善されてきていると思います。

私は「自分の授業に対する評価の原点は何だったろう」と今振り返っています。小学校、中学校、高等学校、短大、大学、大学院と黒板を背に教える経験をしてまいりましたが、まだ「授業評価」などということが盛んになる前から、私は自分の教えた生徒に私の授業について書いてもらっていました。その内容もきわめて単純でいまでも覚えていましたが、次の3項目です。

皆さんのが受けたこの授業について、次の項目に関して自由に書いてください。

1.この授業を皆さんのが来年受けるとした場合、後輩のために「もうやらなくてよい」ということがありましたら書いてください。

2.来年の後輩のために、「ぜひ続けてほしい」という内容がありましたら書いてください。

3.その他「こんなことをやつたら」など自由にお書きください。
以上です。私にはこの3項目で十分だという気がしていました。

そして、生徒、学生の書いたものを読みながら「うーん」とうなったり、時にはほめられて「教師冥利に尽きる」などと喜

びをかみしめたりしてきました。何度もこちらのまったく予想しない指摘を受け、虚を衝かれたこともあります。次は女子高校で教えていた時のある生徒のコメントです。

「先生は、名前を呼ぶ時、ある人には『さん』づけで、ある人には『ちゃん』づけで、または呼びすてだったりして問題がおきます。気をつけてください。」

こういうコメントは男子高校で教えていた時は予想できませんでした。次は大学生のコメントです。

「幼稚園から現在まで数多くの先生方に教えていただいたが、その中で授業の感想をクラス全員に求めた先生はひとりもいなかったと思う。先生の中には、授業を改善してくれるよう意見したくなるような授業をなさる先生もいらした。しかも、そのような先生に限って話がしづらいというのはどういうわけだろう。」

嬉しいことには、私のところを卒立って教師になった諸君の多くが、自分の授業について生徒に感想を書かせているということです。私はこういうやり方を「一人で、できる授業診断」と呼んでいます。次のようなコメントは、私としては少々気恥ずかしいのですが、考えてみれば、こういうコメントがあったからこそ、今までやってこれたという気がするのです。

「私はこの3年間、先生の授業にはいつも感心してきました。1年生の時は、できない生徒にあたっても、最後までその生徒を見捨てずに、結論までみちびいた。たぶん私も、そういう生徒でした。けれども、できないといって先生から冷たく見放されたら、私は立ち上がることができなかつたのにちがいない。私は本当に先生の暖かい態度に感謝しています。」

しかし、また一方感じていることもあります。チョーク1本とテキスト1冊、せいぜいテープ・レコーダーだけで50人の学生を相手にし、総長の教室では一番後の学生を見るのにちょっと仄光立ちしなければならない条件では、なかなか暖かい学生と教師の人間関係が生まれにくいようです。もしかすると私はとても贅沢なことを言っているのかも知れませんが、これが課題であることは確かではないでしょうか。

今後の授業評価について

FD部門・授業評価部門委員会委員 雜古 哲夫

学生による授業評価アンケートが始まり4回目となる。委員という役目柄文学部の先生方にもご協力いただき、学生のアンケートについて今後のあり方や問題点をご回答いただくこととなった。お願いした先生方のアンケートを読んでみると、いろいろと考えさせられることが多かった。授業の方法や内容に関して学生の評判が高い先生のアンケートを読ませていただくと、やはり内容豊かで教授法に気を配った授業をされていることがうかがい知れる。そして、良い授業とはどんなものか、共通したものが少し見えてきた。私が役得で得た授業のヒントを公開させていただくと、要は教える側のモティベーションの高さということになる。つまり先生ご本人が一生懸命に授業をされているということである。一生懸命というのは授業の準備、展開、授業後の提出物の扱いなど、時間のかかる、きめ細やかな作業にも前向きに取り組んでおられるということである。学生のアンケートを読んでみると、彼らは授業外の教員の努力を肌で感じ評価しているようである。教員が前を向けば学生も前を向く。学生を前に向くよう思えば、教員が前を向けばよいということであろうか。

ところで学生の評価する私の成績はまだまだお答え

をいただいた先生方のようにはいかないが、回を追うごとにほんの少しづつではあるが上がってきてている。そして過去4回の授業評価の全教員の平均値を見て驚いた。全教員の平均値も毎年ほぼ全ての項目において上昇しているではないか。学生による授業評価アンケートという新しい試みは、大学全入時代を目前に控えた私たち関西大学の教員にとっても、結果として良い効果をもたらしたといえるのではないだろうか。

現在は講義科目における授業評価アンケートはあっても、その他の全学的な授業評価はおこなわれていない。体育学教室では大綱化前から独自に授業評価を実施しその効果を上げているが、実技、実習においても全学的な授業評価が教員の励みにも繋がるのではないかだろうか。一生懸命頑張った学生はその努力に値した成績評価を喜び、またそれによって励まされる。今後、どのような形で授業評価のアンケートを作成すると良いのか、各科目における特性が高いために一様に同じ内容で作成するのは難しいかもしれないが、教える側が学生に何を提供できるかを探り、これから授業のあり方を模索する指針となるアンケートの作成は、労力と時間を費やすに値する仕事だと思っている。

活動記録(2002.7~11) ●

2002. 7. 3 平成14年度 第5回 FD部門・授業評価部門委員会
 2002. 7. 5 「材料工学実験」ビデオ収録
 2002. 9.20 授業評価・広報誌検討会
 2002. 9.30 第3回 FDフォーラム企画・運営検討会
 2002.10. 2 平成14年度 第6回 FD部門・授業評価部門委員会

2002.10.16 平成14年度 第7回 FD部門・授業評価部門委員会
 2002.11. 7 「中南米経済論」ビデオ収録
 2002.11. 8 「英語Ⅲコミュニケーション」ビデオ収録
 2002.11.25 2002年度 秋学期・後期「学生による授業評価」
 ~12. 7 アンケート実施

掲示板

《第3回 FDフォーラム》開催!

テーマ：「大学の授業改善をどのように進めるか」

日 時：平成14年12月4日（水）13:30～17:00

会 場：千里山キャンパス 尚文館（大学院）1階マルチメディアAV大教室

高槻キャンパス 大学院棟 TD106教室（同時中継）

内 容：第1部「授業ビデオ＜材料工学実験＞について」

小林 武（関西大学工学部教授）

「授業ビデオ＜認知心理学（実験）＞について」

関口 理久子（関西大学社会学部助教授）

第2部「新潟大学におけるFDのとりくみについて」

生田 孝至（新潟大学教育人間科学部長）

● FD部門・授業評価部門委員会委員 ●

部門委員長 水越 敏行 総合情報学部教授
 委 員 藤田 久一 法学部教授
 雜古 哲夫 文学部教授
 長久 良一 経済学部教授
 長谷川 伸 商学部専任講師

雨宮 俊彦 社会学部教授
 堀井 健 工学部教授
 斎藤 栄二 外国語教育研究機構教授
 市川 明 大学事務局 全学共通教育推進機構事務長